

法華経概略図／虚空会の儀式

迹門 | 『始成正覚』を顕す

本門 | 『久遠実成』を明かす

じよほん 序品第一	一巻
ほうべんほん 方便品第二	
ひ ゆほん 譬喩品第三	二巻
しんげほん 信解品第四	
やくそうゆほん 薬草喩品第五	三巻
じゅきほん 授記品第六	
けじょうゆほん 化城喩品第七	
ごひやくでしじゅきほん 五百弟子受記品第八	四巻
じゅがくむがくにんきほん 授学無学人記品第九	
ほっしほん 法師品第十	
けんほうとうほん 見宝塔品第十一	
だいぼだっただほん 提婆達多品第十二	五巻
かんじほん 勧持品第十三	
あんらくぎょうほん 安楽行品第十四	
じゅうじ ゆじゅっほん 従地涌出品第十五	
にょらいじゅりょうほん 如来寿量品第十六	六巻
ふんべつくどくほん 分別功德品第十七	
ずいきくどくほん 随喜功德品第十八	
ほっし くどくほん 法師功德品第十九	
じょうふきょうぼさつほん 常不軽菩薩品第二十	七巻
にょらいじんりきほん 如来神力品第二十一	
ぞくろいほん 嘱累品第二十二	
やくおうぼさつほんじほん 薬王菩薩本事品第二十三	
みょうおんぼさつほん 妙音菩薩品第二十四	
かんぜおんぼさつふもんほん 観世音菩薩普門品第二十五	
だらにほん 陀羅尼品第二十六	八巻
みょうしょうごんのうほんじほん 妙莊嚴王本事品第二十七	
ふげんぼさつかんぼつほん 普賢菩薩勸発品第二十八	

(前) 靈鷲山会

虚空会

(後) 靈鷲山会

『虚空会の儀式』

仏の滅後において、「弘教を“だれ”に託すか」ということを明らかにする付嘱の儀式なのである。実は、宝塔品の中程から嘱累品の終わりまでに説かれているこの『虚空会の儀式』は、“おとぎ話”なんかないのです。私たちが御本尊の前に端座し、勤行・唱題する姿こそ『虚空会の儀式』なのです。そして、この時御本尊に広宣流布の誓いを立てることこそが「付嘱の儀式」なのです。

- 宝塔品…巨大な塔〔宝塔〕が出現し、仏の滅後の弘教の難しさを説き、菩薩たちへ弘教の決意を促(うなが)す。
- 提婆達多品…「悪人成仏」・「女人成仏」を説く。
- 勧持品…菩薩たちが迫害を恐れずに弘教することを誓う。
- 安楽行品…法華経を弘(ひろ)める方法を説く。
- 涌出品…無数の地涌の菩薩が大地を割って躍(おどり)出てくる。
- 寿量品…釈尊が「永遠の仏」を説く。
- 分別功德品～法師功德品…弘教による功德を説く。
- 不軽品…「法華経を弘める者」の福德と、その「弘教者」を毀(そし)る者の罪を説く。
- 神力品…地涌の菩薩に仏の滅後の弘教を託(たく)す。
⇒別付嘱(べつぷぞく)
〔結要(けつちよう)付嘱ともいう〕
- 嘱累品…すべての菩薩・諸天に託す。
⇒総付嘱(そうぷぞく)

『虚空会』での説法のあらすじ

『法華経の智慧／第5巻』

付嘱の儀式を通して、末法に、この御本尊を所持している「人」を指し示し、最大に称赞したのです。(中略)「二処三会」には、深い意義があった。それは法華経全体の構成によって、「現実の世界から『永遠の生命の世界』へ」(靈鷲山から虚空会へ)、そしてまた「現実の世界へ」(虚空会から靈鷲山へ)という“人間革命のリズム”を示している。(p.322～325)